

まちかど対話（十勝総合振興局地域）
各界各層の道民等との懇談（十勝の夢懇談）
懇談録

日 時：平成22年7月26日（月）12時05分～13時55分

場 所：ご馳走家 ゆたか（池田町）

出席者：

【相手側】

前川 幸大さん 大津漁業協同組合青年部長
窪田 悦子さん J A十勝池田町女性部長
山崎 和夫さん 幕別町商工会（忠類支所）経営指導員
岡田 愛啓さん おかだ農園代表
近江 正隆さん (株)ノースプロダクション代表取締役

【道 側】

高橋 はるみ 北海道知事
中岡 正憲 北海道経済部観光振興監
坂井 秀利 北海道農政部食の安全推進監
竹林 孝 北海道十勝総合振興局長

【オブザーバー】

三津 丈夫 北海道議会議員
喜多 龍一 北海道議会議員

（十勝総合振興局 竹林局長）

それではただいまから、高橋知事との懇談会であります“十勝の夢懇談”を始めさせていただきます。私、本日の司会進行を努めさせていただきます、十勝総合振興局長の竹林でございます。よろしく願いいたします。

本日は、十勝管内におきまして、様々な分野で活躍をされております5名の方にお集まりをいただきました。皆さん地域の資源や特徴を活かした活動をされている方々でございます。まず始めに、高橋知事から一言ご挨拶をお願いします。

（高橋知事）

今日はお忙しい中、私たちの“夢懇談”対話の会にご参加いただき誠にありがとうございます。十勝はよく来ますが、また参りました。そして池田町は去年の年末にお邪魔して以来でございます。広い北海道ですが、特に十勝は広大な面積の中で畑作などが行われ、北海道一豊かな農業のエリアであると私自身、全道を回っていつもそう思っているところでございます。

そして、その十勝の中で、今回特に東の方を中心に回らせていただくことになっており

ますが、それぞれの地にしっかりと根付いた地域づくりをされている皆様方にお集まりを
いただき、いろいろなご苦勞やこれからの夢、正に夢談義でありますので、楽しいお話を
ゆっくりと聞かせていただきたいと思う次第であります。

今日、道庁から部長が二人来ております。また今日はスペシャルゲストですね、十勝管
内の帯広市選出の三津先生、そして帯広市以外選出の喜多先生、お二人の道議にもご参加
いただいておりますので、適切なアドバイスをいただきながら、楽しく時間を過ごしたい
と思います。よろしく願いいたします。

(竹林局長)

それでは、これからの進め方をお話いたします。まず私の方から改めて出席者を紹介
させていただきます。その後昼食を召し上がっていただいて、昼食終了後に、地元の皆様
から話題を提供いただきまして、それに対して知事からコメントを頂戴し、更に提供され
た話題などをベースに、それぞれのこれからの抱負や、道政に対する期待などについて意
見交換をしていただければと思っております。

それでは改めて、本日の出席者を紹介させていただきます。知事に向かって右側からに
なります、大津漁協で青年部長をされております前川 幸大さんです。そのお隣、J A十
勝池田町で女性部長をされております窪田 悦子さんです。真ん中の方は、幕別町商工会
忠類支所で経営指導員をされております山崎 和夫さんです。そのお隣が浦幌町でおかだ
農園を経営されております、岡田 愛啓さんです。一番左側になりますが、浦幌町に事務
所がございます、ノースプロダクション代表取締役の近江 正隆さんです。

続いて道側の出席者を紹介いたします。知事の左側が中岡経済部観光振興監です。その
隣が坂井農政部食の安全推進監です。また今日はお忙しい中、オブザーバーとして、地元
選出の三津先生、喜多先生にもご出席をいただいております。ありがとうございます。そ
れではしばらくの間、食事を召し上がり、懇談をしていただきたいと思っております。食事の間、
恐縮ですが、報道の皆さんについては別室の方でお待ちいただければと思っております。
よろしく願いいたします。

(昼 食 開 始)

(竹林局長)

それでは再開いたします。報道の皆様、お待たせして恐縮でございます。今日の懇談会
のテーマは、「とちの魅力発信～豊かな資源を活かした地域づくり」とさせていただきます
ております。

十勝管内は、食や景観など豊かで素晴らしい地域資源を持っており、地域産食材を活用
し、十勝ならではの体験で人を呼び込むなど地域を盛り上げ、その魅力を発信する様々
な取組がございます。

本日はこれらの地域資源を活かして地域で活動をされている、十勝管内の元気な方々
にお集まりをいただいております。まず本日参加されている5人の皆様から、取り組んで
いる内容や普段感じていることなどを率直に、一人4分くらいでお話いただきたいと思
っております。その後知事からコメントをいただき、道の方からも出席者がおりますので、自

由に懇談していただきたいと思います。

懇談の時間は約1時間と少しを予定しておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは右から、前川さん、そして窪田さんという順でお願いいたします。

(前川部長)

大津漁協青年部で活動させてもらっています。大きく分けて年に3回事業がありまして、本来ならば4月にやっておりますが平成21年度は5月に、直販まつりと豊頃町物産販売、あと12月には大津港大漁まつり。これは大津の前浜で揚がったサケなどの魚介類をできるだけ生のままで、皆さんの口に入るような活動をさせてもらっています。

豊頃町物産販売とは、豊頃町に道の駅が数年前にできまして、そこで豊頃町と一緒に何かできないか、ということで、もう少しでサケが揚がる時期なので、それを生で持って行き朝市で店頭販売などをしております。加工食品も良いのですが、我々漁師としては、生でそのまま胸を張れるようなものを売っていきたいと思っています。

(竹林局長)

ありがとうございます。それでは窪田さん、お願いいたします。

(窪田部長)

J A池田町の窪田 悦子です。よろしくお願いいたします。私は若いときから北海道が大好きで、北海道に住みたいと思っていましたが、たまたま知り合った夫が北海道の人で、これはいいかもしれない、と思って付いてきて32年になります。

農業の「の」の字も知らないで付いてきましたが、仕事は何とかやっております。まさか私に女性部長という仕事来るとは思いませんでしたが、皆さんに引っ張ってもらいながら何とか務めております。今、女性部は100名くらいおりますが、みんなで仲良く楽しく研修をしたり、視察に行ったりといろいろな勉強をしております。そして一番力を入れているのが「夕市の会」といまして、私たちが作った安全・安心な野菜をイベントで皆さんへ販売しており、喜んでいただいております。

食品加工の方では「むぎ畑」と名前を付けまして、町と農協の協力を得て販売ができるようになりました。今日ここに持ってきたのは、2年前から販売している、かりんとうとケーキです。私たちが作っている黒豆と小麦粉を、工夫してもらいこだわって作っています。これはカボチャのケーキとにんじんのケーキですが、私たちが作っているカボチャとにんじんを使っています。かりんとうを230円で、ケーキは380円で販売しています。高いかとも思いますが、私たちは材料などいろいろなものにこだわっていますし、安全・安心なものを作りたいと思ったらこの値段になってしまいました。自分で作ってみて、ものを作ることと、価格設定も大変だと思いました。今まで消費者でいたときは安いものいいと思い探したりしていましたが、作ってみると、ものはそんなに安くは売れない、ちゃんとこだわって作ったものは高い値段がついてもいいのではないかと、ということになり、この価格で販売しています。

冬になると羊羹やケチャップも作り、ケチャップはおいしくて大変好評です。今年からJ Aの協力もあり許可を得て味噌の販売ができることになりました。2月に味噌の仕込み

をして、なんとか12月にそれが売り出せるよう頑張っていきたいと思っています。

私たち農家の主婦はとても忙しく、仕事は一人前にしなければならないし、その他に家事もしなければならない、子育てもしなければならない、と皆さん大変な思いをしているのですが、皆さんと一緒に楽しくできることを目指しています。イベントのときはとても忙しい時期で、このお菓子もイベントの前の日に作るのですが、それまでにこの仕事を終わらせておこう、とその間に一生懸命仕事をして、作る時は時間を空けて一生懸命作るようにして、お金にはなりません、みんなが楽しくにこやかに笑顔でやっていくことを目指して頑張っています。

(竹林局長)

今、漁協の青年部、農協の女性部の方からお話いただきましたので、知事の方からコメントをいただければと思います。

(高橋知事)

前川さんは言いたいことの半分も言わなかったのではないかと思います、豊頃町は私も何度かお邪魔したことがあります、JA中央会の副会長をされた山口さんが亡くなられたとき、お葬式にお邪魔をしたり、それからテストコースにも何回かお邪魔をした記憶がありますし、まちかどで地域にお邪魔していろいろな話をお伺いしたこともあります。

前川さんは大津漁協の青年部として、直販、物産販売についておっしゃっていましたが、5月はゴールデンウィークを狙ってということですね。

(前川部長)

前年度まではこの時期よりもっと早い時期にやっていました。この年に海難事故がありまして、たまたまこの時期にずれてしまっただけなんです。本来は農家さんの畑が始まる前に市を開催すると皆さんに来てもらえる、ということで企画をしていましたが、諸事情の関係で5月になりました。

(高橋知事)

今、海難事故があつてということをおっしゃられましたが、ゴールデンウィーク中というのは一つの発想でもあると思います。どのようなものを売られるかにもよると思いますが。

(前川部長)

大津は最終目的地のような地形で、大津に来てしまつたら次に抜け道がないような場所なんです。大津で直販をやつたら次に観光ができる場所としては、この季節でしたら長節湖があり、沼が切れてシジミを捕ったりしに家族の人たちが来てくれるのですが、ゴールデンウィーク時期はまだ寒いので、海に入って遊んだりということができないので、違うもので考えられたら、と。そのついでに直販に顔を出してくれるような、そういうまちづくりをしていきたいと思っています。

(高橋知事)

先ほど、加工ということよりも生で胸を張って売れるようなものを漁師としては提供していきたいと、とてもいいことをおっしゃって、これは重要なことだと思います。一方で分野は違いますが、窪田さんがおっしゃっていたような、生ですばらしいものに更に地元の加工業者の方々とコラボし、加工度を高めてバラエティのあるものを売って、観光業者の方々とも連携をしながらそこで遊べて、一日憩えるような、平たい言葉で言うと農商工連携ってそういうことなんです。地域でいろいろな業種の方々が連携をして、地域全体として盛り上げよう、ということにも広げていただければと思うのですが、いかがですか。

(前川部長)

去年から豊頃町の各農協・漁協・商工会の青年部の中で集まって何かできないか、と話していました。豊頃町は海もあって、畑もあり、一次産業としては豊かなところですよ。そこで我々は魚しか出せないけれども、向こうは畑でとれるものが出せる。ではその何かを作ってみないか、と一度、青年部で集まり昨年加工に詳しい方を講師に呼んだことがあります。今それは少しずつですが一生懸命、豊頃町と一緒にやっている途中です。

(高橋知事)

ではどんどん付加価値が高まって楽しくなっていきますね。

窪田さんは池田で女性部長をされていて、もともと農家さんじゃないところから嫁いで来られたんですね。

(窪田部長)

はい。実家は東京ですが、ちょうど夫が東京へ来ていて仕事場で知り合って、付いてきてしまいました。

(高橋知事)

池田町長には失礼ながら、札幌とかではなく更に奥で、最初の頃は驚かれたのではないのでしょうか。

(窪田部長)

結婚する前に、そういう話も全くないときに、あまり田舎なら嫌だなと思って池田町に見に来ました。そこで納得してきました。

(高橋知事)

それで、もぎたて野菜の「夕市の会」をやっておられるとか、加工販売もかりんとうとか、いろいろと作っていらっしゃるって、価格も安ければいいというものではない、私それは大賛成です。別に輸入品で激安のものを批判するつもりはありません。もちろんそれぞれの消費者が多様なお考えをお持ちだから、安いものを求める方がおられてもいいのです。

ただ、多分池田までこういうものを買いに来られる方を想定して売っておられるのでしょうか。

(窪田部長)

町のイベントと農協のイベントの時に作っているのですが、観光客の方を相手に販売したことがないので。

(高橋知事)

では地元のもの価値をわかっておられる方々に売っておられるということですが、その場合コストもかかるわけですし、材料費だってそんなに安いわけではないし、一定の価格のものを胸を張って売っていくというのは重要なことだと思います。そういうことを理解する消費者の方も多いと思うのです。それは観光客でも同様だと思います。そういう方針でぜひやっていただきたいと思います。

それから味噌のことをおっしゃっていましたが、道内で味噌づくり自慢のお母さん方が結構いるのです。味噌サミットみたいなことをすると楽しいかもしれませんね。

女性の場合にはもちろん農家さんなら農作業もあるし、家事もあるし、育児もあるし、介護のお話も、そういう忙しい中だからこそ、時間を無理して見つけ準備をすることが楽しいと、それも私も働く女性ですのでとても共鳴しています。頑張ってください。

(竹林局長)

それでは次のお三方、観光や交流という取組をされていらっしゃいます。まず幕別町商工会忠類支所の山崎さん、よろしくお願ひします。

(山崎指導員)

私のところ、幕別町は18年の2月に十勝管内で唯一町村合併して、5年目を迎えるところでございます。私が勤務しているところは忠類地区、旧忠類村でこの地域の人口は約1,700人。実際には幕別町が忠類村と合併しまして、南北に長い行政エリアになりました。私どもの忠類地区につきましてはどちらかという国道236号、俗に言う十勝管内では南十勝の方に属していると考えた方がいいかと存じます。酪農と畑作が中心の農村地域でございまして、穏やかな農村景観や日高山脈が眺望できる地域でもございます。

実は道の駅を中心としまして、周辺施設、ナウマン象記念館とか、温泉ホテルとか野菜直売所、公園、パークゴルフ場、オートキャンプ場が集中した場所に設置しておりまして、国道を通行する多くの旅行者に利用されております。また地域内には音楽、写真、絵画、手芸、フラワーマスターなど、多彩な特技を持つ方もいらっしゃいますし、特産品を利用した飲食店やパン工房もこの地域内にはございます。

個々の施設やグループの活動は盛んですが、残念なことにそれぞれの施設や活動グループを紹介するネットワークがなかなか確立されておりません。そのため事業目標や活動ボリュームは違いますが、地域を訪れるお客様にいろいろな情報を提供するために、パンフレットやチラシはありますがなかなかそれだけでは伝わらない、そういう現状です。

本州では日本風景街道、北海道ではシーニックバイウェイ制度というものがございます。

平成18年の6月、そこの広報ルートとして、南十勝夢街道というものが認定されています。実はその中の幕別町忠類部会では、シーニックカフェというのを実施してみようということになりました。このカフェは町営牧場、育成牧場の頂上にある、あずまやで始まりました。ここから眺めます日高山脈ですとか、農村景観が本当に見事でありまして、反対方向は太平洋も見える絶好の場所にあります。そこにウッドデッキやパラソルベンチを設置し、お客様にゆっくりと景観を楽しんでいただくスペースを設けております。

この団体は地域のメンバーで構成しております。ここで私たちボランティアスタッフは、これからお客様が向かう旅先のご紹介やご案内、いろいろなパンフレットだけでは伝わらないものを地元のスタッフが直接言葉で提供する、情報を伝える、いわゆる地域のコンシェルジュといえますか、そういったものを目指して活動しています。またお客様に旅のアンケートをとって、今後の展開に努めるということ、それから参加している活動スタッフのコミュニケーションを深めて、新しい事業の展開を企画立案すること、を私たちは目指しております。

このカフェというのは、7月から9月までの3ヶ月間、毎週土曜日と日曜日にやっており、地域の方が報道機関、観光雑誌等にも取り上げられまして、十勝管内にも相当多くの来客があります。シーズン中に何回も訪問される方もいらっしゃいます。もっと嬉しいのが地元の方が、新しいものが出来たよ、トウモロコシが出来たよ、お客さんに食べてもらって、と現場に持ってきてくれることです。また農協さんも、JA忠類さんはうちの牛乳はよつ葉さんに出荷するのですが、ぜひよつ葉のコマーシャルも兼ねて、うちの牛乳を飲んでくれ、ということで毎週差し入れをしてくれるのです。こういう差し入れがあると、涙が出るくらい嬉しいです。

それからこういった場所でぜひコンサートをさせてくれという合唱グループや、演奏会のグループが訪れます。私たちスタッフもそれぞれ仕事を持っていて忙しいのですが、地域を紹介してお客さんが満足してくれてとても嬉しい。お客さんも景観やコーヒーや牛乳というサービスを受けて満足し、地域にこんな素敵な場所があるということを宣伝してくれます。お客様がお客様の友達を連れてきてくれて、どんどん増えていくのです。そういったことが私たちスタッフとしては一番の喜びです。

お客様が地元でおいしいものを食べたい、広尾に行きますがおいしいお魚を食べるところはありませんか、というとき直接カフェから電話をして、親父さん、ハッカクの焼き物を食べたいのですが今日は開いていますか、と電話をしてあげてお客さんを繋ぐ、そういった地域情報やお客様のご案内事業も一緒にやっております。雑ぱくですが、よろしいでしょうか。

(竹林局長)

ありがとうございました。取組状況をお話いただきました。次に、岡田さんは子ども農山漁村交流プロジェクトをはじめ、いろいろな活動をされていますが、最近の取組をご紹介いただければと思います。

(岡田代表)

この「うらほろふるさとづくり計画」という冊子をご覧いただきたいと思います。もう

一つ、平成22年度 うらほろ子ども農山漁村交流プロジェクト事業というものも紹介させていただきますと思います。かいつまんでお話をさせていただくと、浦幌町では今、民間の力で「うらほろふるさとづくり計画」、これは3本の柱からなっているのですが、地元の子ども達に地元のことを知っていただくということを一番の目的に、ふるさとづくり、地域づくりに繋げていこうというプロジェクトを実施しています。

資料の5ページと6ページに3つのプロジェクトが載っております。その中の一つがうらほろスタイル教育プロジェクト、これは教育の一環で、子ども達にまちのことをよく知っていただくということで、高校は廃校になっていてありませんが、小学生、中学生、そういう子ども達に地域のことを知ってもらおう、そしてその子ども達が学校の授業の中で考え、自分の想いを実際に浦幌のまちづくりにできないか、というプロジェクトです。

中学では3年生がみんなで年間10個や12個のテーマを考えるのですが、そのテーマを含めて子ども達が考えたものを今度は大人が実現する、子どもの想い実現プロジェクトというものがあります。ハマナスを使ったハマナシューですとか、イベントにふわふわ遊具を作ってはどうかということの中学生在が考案して、まちの活性化に繋げるというプロジェクトです。

それからうらほろ子ども農山漁村交流プロジェクト、これが私たちのプロジェクトです。地元の子ども達が意外と地元のことを知らない、という非常に問題視されている部分を含めて、都会や農村に心が病んでいる子ども達が多いということで、私たちが何か出来ることはないかといろいろ話し合いをしました。その中で私たちのうらほろ子ども農山漁村交流プロジェクトでは、事業として町で行っている5、6年生対象のリーダー養成講習会に協力しています。これは2泊3日の日程で行われるのですが、浦幌では今、農山漁村への民泊ということで、1日目は農山漁家に宿泊し、農業や漁業、林業を体験します。中日が自然体験で、山を散策したりし、夜は皆さんでキャンプをします。去年は22名の方が出席されまして、今年は10名の方が出席されます。今年から本州より子ども達を招き入れようと計画したのですが、口蹄疫の影響で実現できませんでした。

もう一つが浦幌町小学生民泊体験学習です。これは何年も前から計画していたのですが、今年初めての取り組みになります。1泊2日の日程で町内の小学校5年生、52名の子ども達全員を学校教育の中で、総合的な学習やいろいろな時間を使いながら農山漁家で民泊体験をさせようと、今プログラムが動いています。今年はできるところから実施するということで、まず一泊を試みようとして、9月の13日から14日までの日程で、この計画を実行する予定です。

またこれは大きな話になってきますが、今、高校生の修学旅行が体験型になっているところが非常に多いということで、平成20年、大阪の高校生が25名、希望者だけでしたが、民泊体験をした経緯があります。それは総合振興局の保健所の関係でしょうか、簡易宿所も浦幌に今23戸ありますが、民泊も含めて修学旅行の受け入れをしたところ、受け入れたお母さんがまたやりたいね、と言ってとても意欲を見せていただきました。

今では振興局の方で、十勝全体を3ブロックに分けて、私たちの方は、今いる東部地区とちほく線、陸別までのブロックに分かれている東北ブロック、鹿追や西の方のブロックになります北西ブロック、それから大樹などの南ブロックとしています。その中の私たちは東北ブロックで、その中で既に、民泊をとっているのは足寄町が10戸、それから本別

町が12戸、浦幌町が23戸、豊頃町が4戸で、東北ブロックでは、320名の人が160名を受け入れようということをやっています。また近江さんの方にも協力していただきながら、十勝全体で修学旅行生を受け入れる動きが出ています。

そういうことで7月に予定をしていたのですが、口蹄疫の影響がありまして、旅行会社さんともいろいろ調整をさせていただきましたけれども、どうしても受け入れ側である酪農家あたりのことを考えると、やはりここで受け入れすべきではないという判断になりまして、7月は中止せざるを得なかったという状況にあります。

今ようやく口蹄疫の方も終息してきましたので、これから10月に大阪から3校入ってきます。受け入れにあたり、都会の食料というのは、浦幌町ばかりではなく、十勝全体で海、山、農業も含めてこういう農村があつて、きちんとあなたたちを支えているのですよ、ということなどについて、理解をしていただくことが一番大切かと思っています。また民泊、簡易宿所の場合、共同で調理をする機会がありまして、我々は一切おもてなしをせず、夜はカレーにしようとしています。なぜかという、そこで実際に収穫したものを食べてもらいたいためで、そう決めさせていただいております。

この我々の取組に、民間の近江さんもそうですが、町がバックアップしていただいております。子ども民泊も含めて、今年は町が300万円、予定をさせていただいております。今までは国の事業でやっていましたが、事業仕分けにあいゼロになりました。その中で道の方からも90万円調整をいただけることも決まりそうですので、それも含めまして、ぜひ知事のお力添えもいただければありがたいと思います。

子ども達がすばらしい環境の中で理解をし、都会の子ども達にしてみれば第2のふるさとなるよう、第2のお父さんお母さんも含めて活動ができればと思いますし、地元の子供達は就職などでいろいろな地域へ行って、浦幌ってどういう町、と聞かれたときに胸を張って、私の町はこんなに素晴らしい町だよ、と言える子どもに育てたいというのが我々の願いでもあります。なんとかご理解をいただきこの活動を進めて、民泊も浦幌の東北ブロックばかりではなく、十勝全体に農林漁業、観光など2400億の素晴らしい産業がありますので、それを全国へ伝えていきたいというのが今、我々が進めている内容です。以上でございます。

(竹林局長)

ありがとうございます。次は今のお話に関連ある部分もありますが、十勝の農業、漁業からの情報発信活動をしていらっしゃる、近江さんの方からお願いいたします。

(近江代表取締役)

それでは私の取り組みから説明させていただきたいと思います。冒頭で自己紹介というか、知事からのご質問の中で触れさせていただいたところですが、東京出身で、19歳で北海道に移り住みました。きっかけは当時テレビで放送されていた北の国からを見て北海道にあこがれて、という形でした。酪農業、畑作業を体験しながらどうしても漁業に就きたいと思ったのですが、なかなか新規で雇う先がないので、リュックサックを背負って釧路から小樽まで2ヶ月近くかかって歩き、唯一拾ってくれたのが浦幌町でした。大津漁協は豊頃町と浦幌町両方で、私は浦幌町という形で漁師の仕事をさせていただき、いろいろ

な体験をさせていただきました。その辺はぜひこの資料をお読みいただけたらと思います。

十勝で漁師さんや農家さんと触れあう中で、最近特に十勝の魅力、価値は、この国の価値であり財産なんだということを強く思っているところです。今はこのようなご時世ですので、東京などに同級生もまだたくさんいまして、話をする機会があるのですが、最近社会的な価値観が今まで以上に変わってきている中で、北海道のような農山漁村の地域がとても大事だね、そういう地域を応援したいね、と同級生や親戚が言うようになってきました。

でも常に上から目線なのです。自分たちには力があって、弱者を救うような感じでものを言われるのです。もちろん都会には素晴らしいものがありますが、私は逆に十勝の魅力や価値に触れる中で食や農業を考えたときに、命の糧、食べ物について、支えるとか北海道を守りたいと考える以前に、自給率の低い都市というのは、農山漁村、北海道の十勝という地域に支えられているという意識を持ってほしいと思って、今いろいろな発信をさせていただいているところです。

今、いろいろな形で発信を代弁してくれるところがありまして、今回用意させていただいたのは2枚もので、7月1日の「食」の将来ビジョン検討本部というところで、今までには農水省だったと思うのですが、各省庁の政務官と担当課長補佐が出てこられて、食は命の全ての根幹として食の将来ビジョンについて検討するため、北海道からは道経連の近藤会長が有識者ということで、委員で出られています。その7月1日の提案事項の中で、冒頭に書かせていただいております、今後の食の総合産業化に向けた啓蒙活動ということで、私のこのような発信を紹介させていただきました。

先ほどの岡田さんの話にも繋がるのですが、農山漁村で農家さん、漁師さんといった生産者が頑張っているから都会にいても生活できるということが、この国の都市部、消費者の人たちに欠けている価値観なのかな、と思いました。先ほど岡田さんが触れられた高校の修学旅行も、単なるグリーンツーリズムとしての受け入れではなく、これから価値観が出来上がっていく高校生、中学生、小学生が実際に農家さん、農山漁村で触れあうことによって、この地域があるから自分たちは食べ物が生産できなくても都会に住んでいける、この地域の問題は自分たちにとっても主体的な問題なんだという意識を感じてほしいのです。

なかなか価値観は簡単には変わらないかもしれませんが、子どもの頃からそういう意識を持っていただけたら、我々はそういう教育を受けていないので、その子達が大人になるときには何か、今想像できないような形で、都市と農山漁村、東京、大阪と北海道のような形での信頼関係が出来上がるのではないかと期待をしているところです。

併せて、農水省の方にバックアップしていただきながら進めていくということで、かなりページを割いて書いているのですが、「にっぽん食糧供給プロジェクト」の中心となる、十勝の若手の業者で構成する「十勝おやじの背中を超える会」というものの立ち上げに一昨年、関わらせていただきまして、彼らと一緒にこのようなプロジェクトを行っております。昨年8月19日には東京の霞ヶ関で130人くらい集めるイベントを開催しまして、農水省からは高橋局長がいらしていました。このプロジェクトは、都市と農山漁村、それぞれの役割があって、都市の人たちのためにも、生産者は食をこれからも自分たちが担っていきます、作り続けていきます、応援してくださいと、都市と農山漁村との信頼関係を

築くという趣旨になっています。

それを具体的に広げるにあたって、昨年からはじめています、「J・フードサポーターズ・ポイントカード」というのを作りました。今ちょうど公募がかかっています農水省の食のポイントシステムというのがありまして、食の自給率アップに繋がる啓蒙活動ということで、この度弊社の方で応募させていただくのですが、一つのシンボリックなモデルになるのかな、と思っております。具体的に申しますと、加盟店を同時募集しているのですが、その加盟店さんでお買い物をします。飲食店などで、会計の時に提示すると100円につき1ポイントたまりまして、そのポイントカードがよくある普通のポイントカードなのですが、大きな違いは失効ポイントです。

期限が来たら流れてしまうのは、マイレージなどもそのような仕組みかと思いますが、これは失効したポイントがこの「にっぽん食糧供給プロジェクト」の活動に寄付されるという仕組みになっておりまして、あえて使わないでこのポイントを流していただくということもできるのかな、ということで、この仕組みは鷹栖町の方で、まちづくりに使われている仕組みと一緒にです。あと東京農大のOBが大学支援するという形でも使われている仕組みとも同じようなものです。

今までは消費者の方といろいろな話をすると、生産者を支えたり支えられたりという表現がありましたが、支えるにはどうしたらいいか、それは高くても買い支えてください、という話をしていたのですが、これを持つことでより明確に意識付けがされると、消費者の意識も想定している方に向いてくるのかな、と思っているところです。この取組は先月出された農業白書の方でも取り上げられております。

あと私は北海道水産業漁村振興審議会で、公募枠で委員をさせていただいております。このような事業のプロデューサーということで、地元ではないのですが、釧路管内の浜中町のウニを販路開拓ということで、今回お手伝いをさせていただいております。ウニというのは殻を割ってみないと身が入っているかどうかわからないものでしたが、地元の漁師さんがとても研究をされて、いつも身入りがいいウニを作られました。ウニは身入りがいいかどうかわからないため今までは割って板に並べたり、海水パックにして、一番いいのが殻付きのまま、という流通がほとんどでした。ただそういうものが出来てしまったので、私の方で東京の著名なシェフさんに使っていただくという販路を繋げまして、それまではだいたい1キロ2,500円~3,000円だったものが今は平均して5,000円となっています。量が知れていますので、そんなにたくさんではありませんが、そのような活動も行っております。

(竹林局長)

ありがとうございました。観光交流という内容で3名の方から取り組みの報告をいただきましたので、知事の方からコメントをお願いします。

(高橋知事)

私が知事になる前、経済産業省にいた時、中小企業行政が長かったので、全国の経営指導員の方々からお話を聞く機会がありました。先ほど山崎さんにお話ししていただいた中身というのは、経営指導員さんとしての本来のお仕事というよりも、むしろ地元でボラン

ティアとして、思いを同じくされる方々とカフェをやって地域おこしをされている、という理解でよろしいでしょうか。シーニックカフェという、景色もいい、正にシーニックの素晴らしいこういった高台で。本当にここへ行きたいですね。よつ葉さんの牛乳も出し、コンサートもしたり、おいしい食べ物も出し、そして観光の案内もしたり、情報提供もしたり、魚が食べたいという人がいれば、ご案内をする。そして幅広い形で地域のカフェを中心として、そこの掘り起こしもするし、また広げて十勝全体というか忠類周辺にはなるのでしょうか、そこのボランティアをやっておられる、そういうことですね。

そうすると、すごく夢のあるお仕事だと思いますが、どのような形でその成果というか、毎年、皆さんいろいろな情報を持ち寄って、今日はこんなことがあった、更にこういうことやろうというフィードバックをしていくとか、繋がれた漁村の方からこのようなことをしていきたいというのがあって、更に活動の輪が広がるという気がするのですが、これからどのようなことを広げようと思っておられるのか、またこれからの夢や、あるいはそれを実現するためこんな問題があるとか、そのあたりのお話をお伺いできればと思います。

(山崎指導員)

私たちは地域のボランティア活動団体の代表等が集まって、運営をしております。まずは地元のいろいろな活動団体のコミュニケーションを深めなければならない。一つ一つの団体はそれぞれ活動しておりますが、この地域は点で活動しているだけではだめで、やはりネットワークを作らなければならないと思います。それから一つの町だけでは滞在型にはなりません。函館市や札幌市のように大きな観光都市があれば良いのですが、例えば幕別町忠類で2日も3日も過ごせるような方策はないだろうか。先ほど何人か酪農家について話されて、今は口蹄疫の関係で出来ない事情もあるかと思いますが、来年は山の散策ツアー、酪農体験、農村体験を組み入れた観光の組み合わせを作ってみないか、という話も出ています。それから私たちの町だけではなく、帯広から南のエリアの中で、町村をまたいでこの十勝に来ていただく、という活動も今出ております。

いつも私たちが話すのは、皆さんが道の駅へ行かれますとよくその市、町、村のパンフレット等が掲げてありますが、ただそこに夏訪れた時に冬の写真があっても困るということです。秋や冬の写真がパンフレットにあるのは良いのですが、今お客様が、旬の時に楽しみたいことを地元の方がまず発信してあげないと、外から来たお客様はわかりません。だから地元の方が熱意を持って説得する、もしくは説明すると、お客様は必ず付いてきます。私たちの住んでいる地域にも、道の駅にはコンシェルジュスタッフがおりませんが、なるべく訪れるお客様は情報を欲しがっているのは確かですので、パンフレットでは伝わらないことを地元の生身の人間がお伝えするということですね。

なるべく滞在型観光を私たちは目指しますが、一つの地域だけで実現できない場合には、両隣の町、村とネットワークを組んでお互いに情報交換をして商品を、といったら失礼かもしれませんが、そういったものを作り上げていかなければならないということを、春夏秋冬いろいろありますが、話し合っている段階でございます。

(高橋知事)

幕別に道の駅はありましたか。

(山崎指導員)

本町にはありませんが、国道に。

(竹林局長)

幕別町忠類の方は道の駅があります。

(山崎指導員)

本町の方は、それを目指した実験店舗を、気持ちだけは熱いものがありますが。

(喜多道議)

まだ進んでいません。

(高橋知事)

十勝は一つとおっしゃる方もよくおられますが、滞在型観光といっても一つ一つの町だけではやはり無理があるので、連携して、相互に協力し合いながら、この高校生の受け入れもブロックごとに何人かずつ、トータルで300人というようにやる以外ないですね。帯広だけというわけにもいきませんしね。そこはご苦勞の種だと思いますが、なぜ道の駅のことを申し上げたかといいますと、十勝といえば北海道どこでもおいしいものの宝庫という中で、とりわけおいしいものが山ほどある、今日のお弁当もそうですね、おいしいものばかりです。それを景観といかにマッチさせていくかが、他の地域との比較において発揮できる十勝の最大の売りのような気がして、素人があまり言うのもなんですが、食べ物をもっと供給できるような形にできれば、更に魅力が高まると思います。

それと昨日私が洞爺にいたから言うのではありませんが、最近中国人をはじめとして、海外のお客さんがとても多いのです。日本全体、とりわけ北海道。そういった場合にまず言葉ですね。先ほど地域コンシェルジュ、パンフレットにはない情報をしっかりと提供するとおっしゃった場合に語学の問題とか、あるいはそのお国の方にわかりやすいような提供の仕方とか、将来的にはそちらも視野に入れた、やはり町を越えての取り組み、これも必要なということを思いました。

それから岡田さんは農園で素晴らしいものをたくさん作っていらっしゃるだけではなく、ふるさとづくり計画、地元の子も達に地元を知ってもらおうということで、いろいろな農山漁村交流プロジェクト、まず地元の子も達を対象に実施されて、そして修学旅行の高校生の受け入れ、東京の子よりも大阪の子は特にいいと思います。はっきりものをいいますからね。案外北海道のものは東京ばかりではなく大阪の方にたくさん行っていますから、大阪の子も達は知らず知らずのうちに北海道のものを山ほど食べているのです。それを一つ一つ、これも北海道だった、これも十勝だった、ということをされているというのは、これからもっとニーズが高まってくるような気がします。

上川の方で田植えの時期に修学旅行での体験を受け入れておられるとか、酪農の体験もチーズ作りとか、搾乳とか、いろいろ全道でもお伺いすることがあるのですが、やはりそうやって農山漁村のことをよく理解してもらわないと、都会って成り立っていない、正

に近江さんのおっしゃるとおりですね。都会の人たちが田舎に対して上から目線とまでは思わないけれども、田舎の価値というものを理解していない人というのは確かにいるような気がします。やはりもっと、日本は都会だけでは成り立つはずがなく、それを更に理解してもらう必要があると思いますので、ぜひふるさとプロジェクトは続けていただきたいし、道は財政が続く限り、どんどん支援はさせていただきます。

ですが、今国でいわれている地域主権の本当の姿というのは、仕分けで削られて困ったと我々も国に対して言っていますが、実はそうではなくて、地域で役立つ仕事というのは地域に財源を移転してもらって、地域の裁量の基にやる、それは道が国に対して言うだけではなく実は市町村の皆さん方もそうあるべきで、本来やはり岡田さんがおっしゃった、道からたくさん一般財源を差し上げて、その範囲内で浦幌町の中の必要な事業に使っていただくというのが本来の姿なのです。ただその理想の姿になるには時間がかかりますので、それまで我々も財源の許す限りはしっかり支援させていただきたいと思います。あの口蹄疫はいろいろな被害を産みましたね。

(岡田事務局長)

今回は涙を飲みましたね。7月8日に来る予定でした。

(中岡振興監)

イベントはいつまで止めたのですか。

(竹林局長)

止めていませんよ。自主的な話です。

(岡田事務局長)

それはそういう話ではなく、自主的に自分たちが酪農家さんといろいろ話し合いながら、決定したことです。

(高橋知事)

道議会でも議論がありましたが、我々は強制してはいませんが、メッセージみたいなものは発信して、御協力をお願いしましたね。

(岡田事務局長)

万が一のことを考えると、という厳しさがありました。

(高橋知事)

実は宮崎で終息したとしても、大陸、台湾、全く終息していないのです。そこからのお客様が日々来られています。これはやはり、宮崎で終息したとしても安心はできません。

(喜多道議)

あれを見ると、どうも人が運んできたという感じがしますからね。米わらや稲わらでは

ないような感じがしますので、やはり人移動で来ているということから考えると、もう少し様子を見る必要があります。

(高橋知事)

道議会のご理解を得て、補正予算が成立しまして、それを活用しながら全道で防疫体制をしっかりとしながら、でもやはり観光立国なので、そこには少しでも影響のないようにやっています。頭が痛いですが最悪の事態にならないように水際作戦をやりながら、ですね。

(岡田事務局長)

そういう予防関係はきちんとやりながら進めていくしかありません。最善を尽くして受け入れをしようと思います。

(高橋知事)

それから近江さんはフードサポーターズポイントカード、とても感銘を受けます。全道にこの考え方がもっと広がればいいですね。先ほど、鷹栖町が同じようなことをやっておられるとおっしゃいましたが。

(近江代表取締役)

そうですね、鷹栖町はみんな旭川に買い物に行かれてしまうようなのです。そのカードは、旭川で使ってもそのポイントが全部鷹栖町に還元されるということで町民の人に広めていることと、東京などへ出て行った人が使える加盟店というのが地元だけではなく、全国にあるので、鷹栖町のふるさと会みたいところで東京の人に持ってもらって、そこで使いながら失効ポイントが鷹栖町に寄与されるというイメージなので、新たなふるさと納税の形として、自治体としても面白いのではないかとということで、注目はされています。

なかなか広まるのは難しいのですが、日本中の人が持ってもらって、その志というか氣持ちに生産者が応えて、自分のビジネスに発展するということではなく生産者発でできる啓蒙活動というか、意識率のアップに繋がるような取り組みがあると思うのです。そういうことを国や道、行政に任せるだけではなくて、生産者としてもやるべきことがたくさんあると思うので、この活動を見せることによってまた信頼関係が生まれ、更に多く使ってもらおうというようなことができればいいなと思います。

(高橋知事)

鷹栖町でホンダのテストコースがありますよね。転勤などで本州と行き来をするような、そういう人たちが全国に広めていくということも狙ってやっておられるのかもしれないね。

それからウニの話は大変興味深くお伺いしたのですが、殻の外から身の入りの状況がわかるという技術があるのでしょうか。

(近江代表取締役)

身の入りではなくて、外れがないのです。

(竹林局長)

養殖というか、捕る段階で間違いなく詰まっているものだけを収穫するというか。

(近江代表取締役)

常に昆布をたくさん食べさせて、ということです。

(高橋知事)

では浜中に限らないのでは。

(喜多道議)

広尾でもやっています。厚岸町、浜中町、昆布森、みんなやっています。

(近江代表取締役)

だんだんそれは広まってきていますね。

(高橋知事)

三津先生、何かコメントをお願いします。

(三津道議)

いろいろ話がありましたように、人様にものをいうときには自分たちがきちんと地元のことを知っていることが重要な気がします。また、人様にいろいろなことを言っても、果たして何人の方がもう一度訪れてもらえるか、ということに意を用いるということが工夫だと思いましたが、生で売るという話もありましたが、生だけではなく、加工をすればこんなに広がりがあるということが生の扱いだし、食というのも加工することによって、ものすごく未来に広がっていくというのがあると思います。これも地域の人がどういう加工ができるかということを知らなければなかなか宣伝できないと思いますので、それぞれのご苦勞をいただいている皆さんに、心から敬意を表しつつ、私も頑張らなければならぬと思いました。

とにかくこれからは、道路網でどのように短縮して交流の輪を広げていくかということもあります。そうすると生ものの輸送に今まで5日かけたものを時間短縮することによって4日間で運ぶ、生鮮度が高まれば価値が高まるのです。そここのところの工夫をどうやっていくかというのは大事なコンセプトかと思うし、政治の世界でいろいろと工夫しながら頑張っていきたいと思います。これから皆さんと一生懸命連携をとっていきたいと思ひます。

(竹林局長)

ありがとうございます。それでは喜多先生から一言コメントをいただければと思います。

(喜多道議)

道の駅の連携の話や、様々な取組についての参考になる話を私も知事と同じ思いで聞いておりました。特に子ども農山漁村交流プロジェクトというのは、産消協働連携事業でも長沼町、大樹町ということでしたけれども、この岡田さんの取組というのは地域の人たちに地元を知ってもらい、そしてまた多くの人たちに知ってもらいというコンセプトで、それを地域全体でやっているというところに浦幌町の取組の特徴がありますね。どこか勘違いをして地域おこしをしたい、なんとか自分の町を活性化したいからこういうことをやりたいと農山漁村交流プロジェクトを実施すると。これは教育から入ってもらわなければならない、子ども達に来ていただいて何を提供するか、それは地域の活性化、このままでは地域が衰退するから子どもが来て、食材をたくさん使わせてもらって、という経済活性化ではない、ということは何回言ってもわからない地域がありますけれども、話が違うじゃないかというところは、我々感じてきたところで、浦幌町の取組はいいなと感じます。

予算が切られたという話がありますが、去年は文科省の、また角川市長に来ていただいて、今年は何分政府の高官が何分横浜だと思いますが、十勝における子ども農山漁村交流プロジェクトの実際のフィールドでの活動状況、どのようなことをやっているかということを見てもらおうというような仕掛けもしているところで、8月に横浜の子ども達が来ているところでやろうとしています。だいたい8月8日、9日、10日くらいに日程も固まっていますが、そのような機会に浦幌町のことについても、後でまた連絡を取らせていただきたいと思えます。

今のところ命をテーマにした馬を子ども達がお世話をしながら、毎日やったことを振り返り、そこで気づき、そういったことを餌やりの後自分たちのご飯を作る、ということの一つ一つ命をテーマにしたコースだとか、何カ所か見て歩く、そして切った予算も反省してもらおうと、良い意味で深めてもらうことも大事なのかなと思えます。良いことをしていれば、きっと世間という名前の神様が評価してくれるだろうという信念の基に頑張っていたきたい、我々も先ほど三津先生のおっしゃったようなスタンスで連携をとってやっていきたいと思えます。

(竹林局長)

ありがとうございました。実はもう予定の時間が来てしまいましたので、最後に今日は食と観光の担当部長が来ておりますので、一言ずつ感想だけ述べていただいて、最後に知事からお話いただいて、終わらせていただきたいと思えます。では坂井推進監からお願いいたします。

(坂井推進監)

大変元気なお話を聞かせていただきまして、嬉しく思っております。特に水産関係の前川さん、農業関係の窪田さん、岡田さん、それから地域の中でいかに他と区別した農業的に水産的に成り立っていくような、そういうものを掘り出していくというところで一生懸命やられている姿がとても印象に残りました。

水産関係では大津漁協さんで聞いて思い出したのが、我が村を美しく、の運動で去年、

婦人部さんがアキアジのいずしを作られて、賞をとられた。だから若者が元気でご婦人が元気なところは一番元気なんだろうと私は思っています。これからも頑張っていたきたいと思っています。窪田さんのいろいろなお話も印象に残っていますが、特にどうやって他と区別したものを作っていくか、これはやはりアイデアの勝負になっているのではないかと、ですから私どももいろいろご支援申し上げていきたいと思っています。

(竹林局長)

では、中岡振興監から、お願いいたします。

(中岡振興監)

山崎さんのお話にあった、なかなか市町村の枠を超えられないというお話で、いろいろな各地域の方々が新しい観光メニューを、昔からある北海道の、例えば美幌峠や阿寒湖という固定的に何とか北海道がずっと持っていたイメージ以外のところを一生懸命商品化しようという取り組みをされていて、いろいろな商品を作られているのですが、たいていやはり自分の町の中だけで完結してしまうようなメニューにどうしてもなってしまう。

我々の仕組みが悪いのかもしれませんが、それをおっしゃったようにいくつか繋げて、例えば隣の町へ行く、1日のうちに例えば向こうへ行ったりこっちへ行ったりともう少し広い範囲で動いていただけるといふことがないと、作ったものをいろいろな人に食べていただくとか、見ていただくということではなかなか出来にくいので、旅行する人に市町村は関係ありませんから私どもも一生懸命枠を越え、回れる範囲を円形に捉えて、それを出来るだけ地域の皆さんに頑張っていたくというようになってもらわないと、その町村さんがなかなか豊かになっていかないような気がします。

ぜひ我々道庁としては今おっしゃった地域を市町村の枠よりもう少し広げて連携をとれるような形、それをもう少し推進していかなければならないのかなと改めて思いました。

それからもう一点、今まで我々が道外の人に、今知事が言っていたウニ以外にもいろいろなおいしいものを作られているのを、生で提供するものもありますが、お菓子のようにしてきちんと上手においしくいただけるようなものをどんどん作っておられるので、これを北海道の新しい魅力という形で、地域の我々自体がちゃんと体験して、来られた観光客にどこで売っているの、と聞かれたときに知らないというような住民がいないようにするということも大変大事なことだと思えます。我々も一生懸命頑張り、お手伝いさせていただきます。

(竹林局長)

それでは話は尽きないわけですが、時間が参りましたので、最後に知事から一言いただいて、終了させていただきます。

(高橋知事)

もうたくさん話させていただいたので、お話はさせていただかないかと思いますが、このかりんとう、おいしかったですね。この甘い方はかりんとうというカッキーのような感覚でいただけますが、塩味の方はむしろおかきのようなですね。甘みが全くないし。かり

んとうというイメージではありませんが、新しいスナックとしてどちらも合うと思いました。これからも頑張ってください。ありがとうございました。

(竹林局長)

以上で“十勝の夢懇談”を閉会いたします。ありがとうございました。

< 記 念 撮 影 >



(前列左から) 近江さん、岡田さん、高橋知事、前川さん、窪田さん、山崎さん
(後列左から) 坂井推進監、中岡振興監、喜多道議、三津道議、竹林振興局長